

カレコプロジェクト

ソロモン諸島 サンタクルーズ諸島沖地震津波 復興支援活動

最終報告書

2013年5月

カレコプロジェクト実行委員会

第1章 プロジェクトの概要

1. 背景

現地時間 2013 年 2 月 6 日（水）午後 12 時 12 分、ソロモン諸島テモツ州サンタクルーズ諸島南南西の沖合 33km、深さ 33km の地点でマグニチュード 8.0 の強い地震が発生、地震とそれに伴う津波によってサンタクルーズ諸島の大部分が被害を受けた。津波は高い所で 3m に達し、内陸への浸水は最大で 1km にまで達した。この災害でサンタクルーズ諸島内陸および沿岸に位置する 75 コミュニティ、1,522 世帯、6,482 人が被災し、特にネンドー島西側沿岸の 15 コミュニティは深刻な被害を受け、直接的な死者は 9 名、けが人は 13 名にのぼった。また震災後 2 週間はマグニチュード 5.0 以上の地震が 90 回以上観測され、うち 2 回は 7.0 を超える強い余震が発生し、家屋や港、学校などが一部破壊されたほか、多くの個所で土砂崩れが確認された。

本災害発生を受け、ソロモン諸島で活動する青年海外協力隊の有志および特定非営利活動法人エーピー エスディ（APSD）が中心となり、ソロモン在住の日本人を中心とした被災地への復興支援活動を行うことを決定した。また、日本救援衣料センターより 5 トン（350 箱）の新品および同等品質の中古衣料を提供してもらうことが決まった。しかし、既に被災地には緊急支援物資として衣類がある程度送られていることから一部の医療を救援物資として提供して残りを首都ホニアラにて販売し、その収益金を国家災害管理局に寄付することとした。



図 1-1-1 ソロモン諸島と震源



図 1-1-2 サンタクルーズ諸島 被害状況



図 1-1-4

津波で壊滅した村（ネンバ村）

図 1-1-5

津波で倒壊した家屋（ネンバ村）

図 1-1-6

避難生活を送る人々（ネア村）

2. 実施団体および協賛企業

- 実行委員
 - 特定非営利活動法人 エーピー エスディ（APSD）
 - 青年海外協力隊（有志）
 - Solomon-Japan Alumni（在ソロモン JICA 研修 OV 会）
- 特別協賛
 - （NPO 法人）特定非営利活動法人 日本救援衣料センター
- 協賛・協力企業・団体（アルファベット順・敬称略）
 - JICA SOLOMON ISLANDS OFFICE
 - SMM Solomon Ltd.
 - 在ソロモン日本大使館
 - ソロモン キタノ メンダナ ホテル
 - Y. SATO & CO. LTD.

3. 目的

ソロモン在住の日本人として、サンタクルーズ諸島沖地震津波で被災したコミュニティの復興支援に貢献する。

4. コンセプト

- オールジャパンによる被災地への支援

日本の NGO や寄付者、そしてソロモンに在住する日本人およびソロモンを拠点とする企業や団体が一丸となって被災地への支援を行う。

5. 実施の流れ

プロジェクトの実施体制は、図 1-5-1 カレコプロジェクト実施体制を参照のこと。

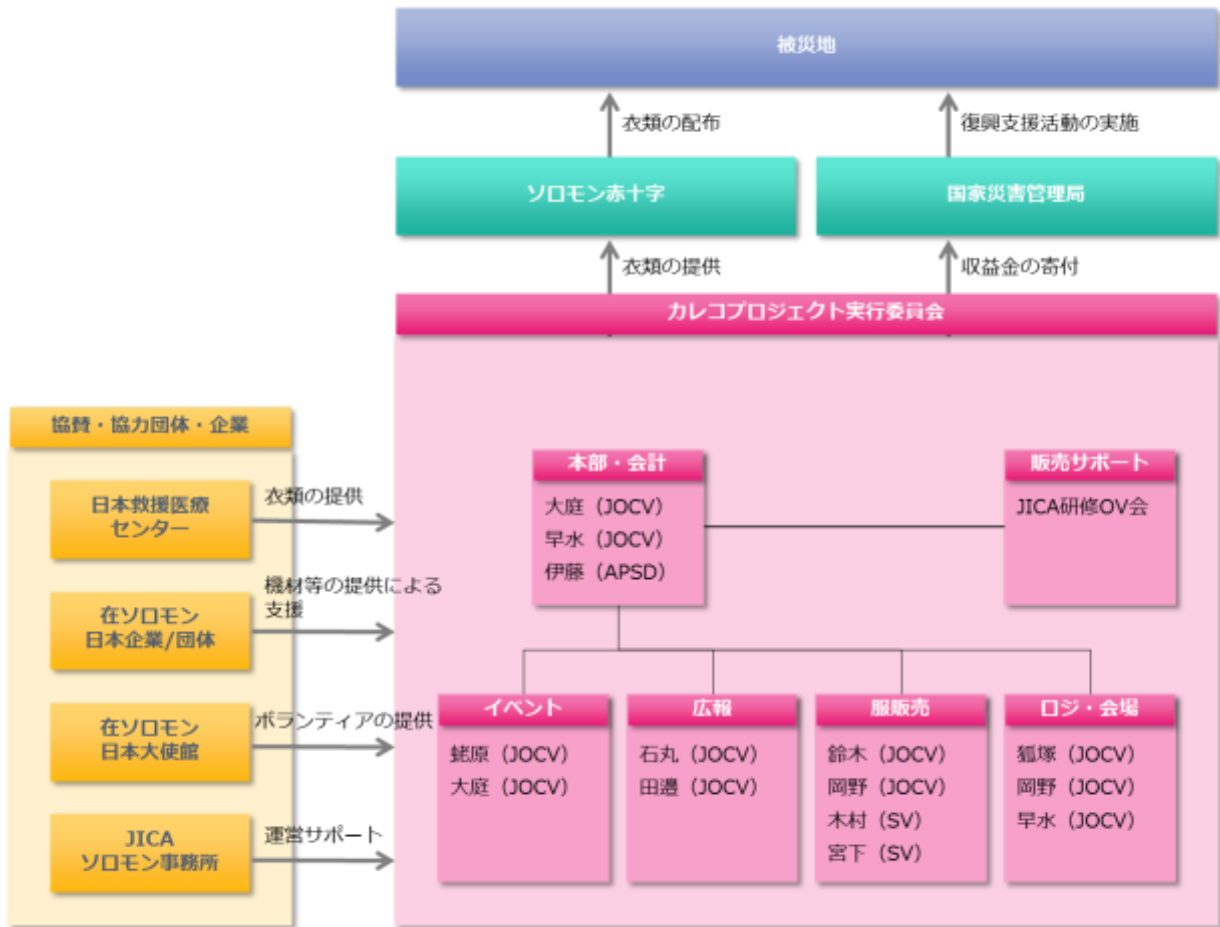


図 1-5-1 カレコプロジェクト実施体制

第2章 販売イベントの実施概要および結果

1. イベントの実施概要

- 実施日時：2013年4月13日（土）9:00～16:00、14日（日）12:00～17:00
※14日は天候不順のため、開店時間を遅らせた。
- 会場：首都ホニアラ アートギャラリー
- 内容：日本の新品（もしくは同等の中古）衣類の販売
津波写真の展示、防災映像の上映、環境教育普及活動

2. 販売実績・寄付金の詳細

販売実績はホニアラでのイベント分およびギゾで隊員が販売した分を含め、合計で 102,937.0 ドルとなった。また、いくつかの団体等から本活動に対して寄付を頂き、その合計が 14,428.5 ドルとなった。それらの合計からイベント開催にかかった経費 9,463.6 ドルを引いた本プロジェクトにおける利益は、10,7901.9 ドルであった。各項目の詳細は、表 2-2-1 販売実績および寄付金の詳細を参照のこと。

表 2-2-1 販売実績および寄付金の詳細（単位：SBD）

服販売	ホニアラ	100,977.0	
	ギゾ	1,960.0	
	小計	102,937.0	
寄付	アーティストアソシエーション	925.0	会場を管理するソロモンの芸術家による団体より、会場内での物品販売収益の 50%を寄付
	パンパイプバンド	623.4	イベント内で演奏を行ってくれたパンパイプバンド「TARAWASIWASI NI AU」のパフォーマンスに対する観客からの寄付
	ソロモン・リリーフ	11,669.4	ソロモン・リリーフのホームページ内で呼びかけた募金
	健康フェア	1,210.7	3月にソロモンの青年海外協力隊がギゾで行った健康フェア内で行ったファンドレイジングの収益
	小計	14,428.5	
	経費合計	-9,463.6	
	合計	107,901.9	

3. イベントの様子

二日間でソロモン人を始め、ソロモン在住の外国人など多くの人が会場を訪れた。初日は新品 20 ドル、子供服 10 ドル、二日目は雨による開場の遅延もあったことから全品 10 ドルにて販売した。来場者からは「日本の質の良い服がこの価格で買えるのは安い」という意見が多く聞かれ、リーフハウスには多くの人だけが出来た。また別のリーフハウスでは隊員による環境教育普及活動、防災啓発活動などが行われた。環境教育のブースで

は隊員が古紙を使った折り紙教室を開催し、多くの子どもたちがアクティビティを楽しんだ。防災啓発活動では、今回の津波で被災したコミュニティの写真パネルを展示、また東日本大震災の映像上映も行われた。午後からは会場の中心でパンパイプバンド「TARAWASIWASI NI AU」による演奏が行われた。

- 写真



盛況の売り場



熱心に服を選ぶソロモン人①



熱心に服を選ぶソロモン人②



熱心に服を選ぶソロモン人③



販売ボランティアのスタッフ



店内の様子



隊員による折り紙教室



被災地の写真展示



防災啓発ムービーの上映



服販売の様子

スタッフ全員での記念撮影

パンパイプバンドによる演奏



図 2-3-1 日刊紙「Island Sun (2013年4月18日発行)」に掲載されたイベントの様子

4. メンバーの所感

■ 大庭 (青年海外協力隊・実行委員長 本部担当)

まず、このイベントに関わり、協力してくれた全ての人に、改めて深く感謝申し上げます。一方、まとめる立場としての力・経験不足も痛感しました。私自身、隊員への呼びかけをはじめにした人間でありながら、配属先が国家災害管理局ということもあり、災害対応や別の支援プロジェクトに追われていました。本来されているべき通関書類の手配や JICA 事務所との合意の未達などはその一端であったと認識しています。そんななか、自ら手を挙げてまとめ役を買って出てくれた早水さんがほとんどの実務を受け持ってくれ、フォローをしてくださいました。彼女抜きではこのプロジェクトの成功はなかったと思います。本当にお疲れ様でした。うまくいかなかった部分を含めても、震災発生から 2 か月という短期間でこれだけの規

■ 早水（青年海外協力隊・実行副委員長 本部担当）

日本で東日本大震災を経験し、会社を辞めて NGO に移り、震災支援とりわけ福島への支援に携わりました。人が人の命を守りたいと願う想いは、先進国であっても現代の社会では 100%届きません。複雑な思いを抱え、「年齢や立場が上がる前に世界を、現場を見て視野を広げたい」そう考えソロモンへ発ちました。

渡航後、約半年でソロモンでも震災が起き、津波被害が起きました。

今回のイベントではメッセージが届けなかったのです。「日本も、ソロモンの小さな島テモツの人々のことを想っています。」という気持ちです。また、何かしたいという人たちの受け皿になれたらという想いもありました。今回はソロモン人含め 50 人以上の人に関わってもらうことができ、私としてはそれも 1 つの成果です。

関わってくれたみなさま、チャンスをくれたみなさま、本当に有難うございました。

■ 伊藤（特活）APSD・実行委員メンバー 本部担当）

まず、被災者、被災地域の皆様に心からお見舞いを申し上げます。

ソロモン諸島は、大小約 1000 から成る島嶼国です。時に今回の地震や不意に見舞う自然災害には脆弱性が大きく露呈します。この支援活動は、その予期せぬ震災に対し、ソロモンで活動する有志が立ち上がったものでした。誰も、この支援の為に派遣された人員も予算もありませんから、振り返るにすべてが不十分の環境の中、不具合や課題も、また携わったスタッフの負荷も少なからずありました。2007 年にもウエスタン州で大規模な震災がありましたが、今回の支援活動はその際のスキームを再現した形になりました。被災時に「出来ることをやる」と言う事だと思いますが、今回も、震災時にソロモンに居ながら自分達で出来る事など限られていたことを多くのメンバーは痛感していたはずで、そんな中、過去の経験も活かし「出来るか出来ないか」で躊躇せず「やるかやらないか」に立ち会い、結果、報告の通りの成果をこのメンバー達が成し得たことは、次の世代や時代に申し送る意味でも大きな功績と言えます。

東北の震災から世界が経験した最初の地震津波の被害に対し、オールジャパンでソロモンの震災支援が行われた事、特に JOCV の実行委員スタッフ、メンバーに敬意を表します。同時に応援を寄せて頂いた現地企業やサポーターはもちろんですが、忘れてはならないのが日本で衣類を集め迅速な対応でこの支援を支えて頂いた JRCC 様、提供いただいた市民・企業の皆様、また、草の根の募金活動を行ってくれた仲間達がいる事です。現場はソロモンだけではなく、もう一つの活動現場からそれぞれの意思と気持ちを届けて頂いた事に、改め感謝を申し上げたいと思います。

最後に、個人としては NGO の立場でありながら協力隊 OV として、現役の協力隊員とこの活動に参加出来た事を大変うれしく思います。願わくば、今回の経験が適切に継がれる事で、有事に限らず、あらゆる形でソロモン-日本の更なる関係醸成の一助になる事を期待して止みません。

■ 蛭原（青年海外協力隊・実行委員メンバー イベント担当）

2 日間とも駆けつけてくれたバンパイプグループのメンバーや、防災資料の展示、折り紙教室、ラジオ体操を担当してくれた協力隊員、音響機材やテント等の物品を手配してくれたスタッフ、当日の会場や機材の準備や操作を行ってくれたスタッフ等、それぞれの仕事を協力的に行ってくれたため、非常にスムーズに進行させることが出来ました。買い物の中に足を止めてイベントに興味を持って見ている参加者も多く、カレコプロジェクトを盛り上げる事が出来たのではないかと思います。

私個人も楽しみながら参加させていただきました。ありがとうございました。

■ 石丸（青年海外協力隊・実行委員メンバー 広報担当）

今回のイベントを通して、協力隊の仲間と深く関わることができお互いをよく知る事ができて良かったです。広報活動を通じてソロモンのメディアのことがわかり、自分の活動を広めるために生かせる、良いコネクションを作る事もできました。ソロモン人と一緒に協力し合いながら仕事をして、予想以上に彼らが一生懸命に働いてくれたことに感銘を受けました。また自分達だけではなくそれを取り巻く様々な環境を知ることもできました。一つの目標に向かい、様々な人の協力を得るために説得させるのはとても大変なことだと実感しましたが、勉強になりました。反省点としては、他組織への協力願いをもっと初期の段階から行っておけば、早くから多くの方々の協力を得られたのではと思っています。

■ 鈴木（青年海外協力隊・実行委員メンバー 販売担当）

今回のカレコプロジェクトを振り返ってみると、ソロモンの人にとっても助けられ支えられたなという印象が一番です。ソロモンのボランティアに対して、どうしても時間にルーズなのではとか集中力を切らしてどこかへ行ってしまわないかという不安を抱いてしまっていたのですが、販売当日は誰一人集中力を切らすことなく、皆どれだけ空腹でも持ち場を離れずに、黙々と自分たちの仕事をこなしてくれていました。また、各販売ブースに、ソロモンボランティアの中からリーダーを作って仕切ってもらったことが功を奏し、それぞれにアイデアを出し合って協力したことで、大きな混乱もなくスムーズにカレコ販売を終了することができたように思います。

当日までの流れでの一番の苦労というところ、日本からの荷物が到着予定日にきちんと着くのか、荷受けにかかる日数等不確かな事が多く、運搬などの人員確保に四苦八苦しました。幸い APSD の伊藤さんの取り計らいによって、トラックの手配、運搬、荷物の一時保管場所まで面倒を見て頂いたことで無事に荷受けが終了しました。また、当日の販売をどのように展開するかということについて、2007年の際のイベントを参考にして、当初はテントを借用してテント内で行う予定をしていましたが、実際に会場予定地を見学に行ったところ、リーフハウスを借りる方が設営等の手間も省けることからリーフハウスを使用することにしました。このことによって、よりソロモンらしいイベントになったのではないかと感じています。

今回のイベントは、2月に起きた地震、津波によって被災したテモツの支援が目的であり、たくさんの方々のご協力のおかげで、その目的は達成できつつあると思っています。ですが、私たちにとっては、それ以上に大きな収穫を得られたと感じています。イベントを行うに当たり、イメージの共有や意見の食い違い、ソロモンならではの問題など様々な問題が浮上してきました。実際に、私自身は何も問題解決に役立つことはできませんでしたが、これらの経験は今後の人生において大変貴重なものになったと思います。そして、最期にはソロモンボランティア、日本人皆が一体感を得られたと感じています。日本から支援して頂き、このような貴重な経験をさせて頂いたことに深く感謝いたします。

第3章 支援活動の実施計画

1. 支援活動策定

被災地の復興支援活動の策定はソロモン政府が関係機関の支援のもと作成した復興人道支援計画（Humanitarian Action Plan for the Santa Cruz Earthquake and Tsunami Response 2013：以下、HAP）にもとづき行われている。国家災害管理局（以下、NDMO）およびそこで活動する青年海外協力隊員との協議の結果、生計再建（農業・漁業など）に関わる活動に「**農業用ドライヤーの再建支援**」を行うことを決定した。

表 3-1-1 支援活動と HAP との関連

支援活動	Cluster	Sector	Activity	How to contribute
農業用ドライヤーの再建支援	Livelihood	Agriculture	A1	生計手段の回復 より良い生活環境の構築

2. 農業用ドライヤーの再建支援

- 背景

今回の地震と津波によってコプラ（ココナッツオイルの原料となるココナッツの中身を乾燥させたもの）やカカオ（チョコレート原料）、そしてテモツ州名産のナンゴ（乾燥させたブレッドフルーツ）を作るためのドライヤー（乾燥小屋）が、多く破壊された。これらの農作物はソロモンのコミュニティ住民たちの大きな収入源であり、これらの産業を早急に再開することが早期の復興を実現するためには欠かすことができない。そこで、ドライヤー再建のための資材一式を、テモツ州農業局を通して農家に提供することとした。

- 支援対象

- 活動内容

- ① 提供資材の調達（ホニアラ）
- ② テモツ州農業局との調整
- ③ 農家へ資材の引き渡し
- ④ 農業局主導によるドライヤーの再建